

鬼より怖い両王手

鬼より怖い両王手

作 亀尾佳宏

【登場人物】若侍

宿屋の亭主

廃寺の僧

【上演時間】約30分

【あらすじ】

ひと月前に旅に出たまま行方の分からなくなった将棋好きの弟をさがしに旅に出た若侍が宿屋の亭主と将棋を指している。近くの廃寺にこれまた将棋好きの坊主がいると聞いた若侍はそこを訪ねるのだが・・・。

暗闇から声がする。

亭主 桂ですかね。

若侍 桂ってことはなかるう。

亭主 いいとこ桂ですね。

若侍 角ってことは。

亭主 いやいや、そこまでではないでしょう。

若侍 結構いい働きすると思うんだがね。

亭主 動きは悪くないんですがね。

若侍 桂かね。

亭主 ええ、いいとこ桂ですね。

若侍 じゃああんたは？

亭主 私ですか。玉ですかね。

若侍 玉かね

亭主 へえ。

若侍 こりや大きく出たね、私が桂であんたが玉かい。

亭主 まあそんなところで。

若侍 それにしっちゃ弱いね。

亭主 駒の動きが悪いんで。

若侍 言うね。駒のせいかね。

亭主 なかなか言う通り動かないんで。

舞台が明るくなると、宿屋の亭主と宿をとっている若侍が縁側で将棋を指している。若侍が優勢。苦悩する亭主。

亭主 うー。

若侍 ほら、次はあんたの番だよ。

亭主 わかっていますよ。

若侍 わかってんならさっさと指したらどうだい。

亭主 意地が悪いねお侍さん。さっさと指せるんなら指してますや。・・・じゃ、これで。

若侍 はいはい、桂（けい）の高飛び歩の餌食ってね。

亭主 あ、いけね。

若侍 これで桂馬が三枚と。

亭主 どうも桂の動きがよくないみたいで。

若侍 あんたが動かしてんだよ。

亭主　これはどうだ。
若侍　なるほどそうきたか。ではこうだ。
亭主　あ、さっそく使ってきましたね、私の桂馬。
若侍　もとはあんたのでも今は私の桂だからね。どう使おうが私の自由。
亭主　それはごもつとも。では三十六計逃げるにしかず、と。
若侍　お、逃げたね。
亭主　はい、逃げましたよ。
若侍　じゃ、これはどうだ。
亭主　あ、また桂馬。はい。
若侍　もう一つ。
亭主　また？はい。
若侍　三桂あって詰まぬことなし。
亭主　なんです？それは。
若侍　格言さ。三つ桂馬が手になれば攻めの幅が広がる。
亭主　なんの桂馬ごとき。こっちには角が二枚あるんだ。
若侍　ところが私は三桂あって負けたためしがない。
亭主　いや、まだまだ。
若侍　あ、そう逃げる。じゃあこうだ。王手。
亭主　あいたたた。じゃあ・・・。

亭主は逃げ道をあれこれ探す。

若侍　考えたって無駄だよ。詰んでんだから。
亭主　詰んでますか。
若侍　ああ、詰みだ。これで今日の宿代も。
亭主　へえへえ、お約束通りいただきましたません。
若侍　悪いね。
亭主　いえいえ、悪ありませんから、もう一番。
若侍　こりないね。
亭主　好きですから。
若侍　次は何を賭ける？
亭主　明日の宿代を。
若侍　よし、乗った。

二人は駒を並べなおす。

若侍 この調子だと私は一銭も使わずにのんびりできそうだ。
亭主 ええ、ええ、好きなだけゆっくりしていただくさいな。
若侍 いいのかい。仕事なくて。
亭主 私の仕事はお客さんのお相手をするので。
若侍 してきなよ。
亭主 してますよ。
若侍 私のことはいいからほかのお客の。
亭主 他に泊まりの方はおりませんので、今日の仕事はお待さんのお相手。
若侍 どっちが相手をしてんだか。
亭主 もちろんあたしですよ。お客さんをもてなすのが私の商売なんですから。
若侍 しかしこれじゃ商売にやららんね。私が何日泊まろうとあんたにやお金は入りそ
うにない。
亭主 言いますね、お待さん。
若侍 ちよっとは手加減してやりたいくらいだが勝負の神様に申し訳ない。
亭主 いいんですよ。こっちも何かを払うわけじゃないんですから。負けてもただで泊
まってもらうだけ。勝てば宿代がもらえる。この勝負、端から私に損はない。
若侍 なるほどね。そいつはいい商売だ。
亭主 ですからやめられない。

打ち続ける。

亭主 こちらにはいつまで。
若侍 さあね。用が済んだらおいとまするよ。
亭主 どんなご用事で。
若侍 鬼退治。
亭主 鬼退治？そいつは物騒な話で。
若侍 いないかい？ここいらに鬼は。
亭主 長く住んでおりますが一度も。
若侍 では鴨は。
亭主 鬼か鴨かとは妙なお尋ねですね。
若侍 角の新という弟がいてね。
亭主 角ですか。
若侍 そいつがね、ひと月前湯治に行くって出たっつきり帰ってこないんだ。
亭主 へえ。
若侍 あいつは俺とおんなじで将棋に目がない。その角がひと月も帰ってこないんだ、
こいつはきつと旅先でいい鴨を見つけたか、それとも鬼みたいに強い相手に捕ま

亭主 　　って身ぐるみはがされてんじゃないかと思っ
若侍 　　なるほど。それで鬼か鴨か。
亭主 　　心当たりはないかい。
若侍 　　それなら心当たりが。
亭主 　　ほう、あるかい。
若侍 　　ほら目の前に。
亭主 　　鬼の方がい、それとも鴨の方がい。
若侍 　　もちろん鬼で。

亭主はにやりと笑う。若侍も冗談だと分かり笑う。

若侍 　　俺はね、はじめあんたが鴨じゃなかったって思ってたんだ。
亭主 　　それはまたどうして。
若侍 　　ここにいりゃ好きだけ将棋が指せる。おまけに宿代もいらな
亭主 　　この局はいただきますよ。
若侍 　　そこなんだ。
亭主 　　へ？

若侍 　　さっきあんたが言った通り俺が勝っても宿代がただになるば
亭主 　　かき足りない。
若侍 　　へえ、そうですな。

亭主 　　私が負ければ銭がとられる。
若侍 　　ですから私は負けっこない。鴨じゃないでしょ。
亭主 　　ああ、どうやらあんたじゃなさそうだ。まあ鬼でもないがな。
若侍 　　当たりは。　　どうだい、他に心

亭主 　　ですから私が鬼となって今に旦那を、
若侍 　　ではこれで。鬼より怖い両王手。

亭主 　　あ！
若侍 　　逃げられないよ。両方からにらんでんだから。

寺の鐘が鳴る。

亭主 　　近くに寺がございましてね。
若侍 　　寺かね。
亭主 　　へえ。その坊主が将棋に目がなくて。
若侍 　　強いのか。
亭主 　　まあ私よりは。

若侍 それじゃあ物差しにならんよ。あんたより弱いのをみつける方が大変だ。
亭主 これが坊主に似合わず熱くなる質（たち）で。
若侍 賭けるのかい。
亭主 そりやもう。負ければ負けるほどに吊り上げます。
若侍 鬼ではなく鴨の方が。
亭主 ひよっとすると角さんとやらは。
若侍 おるかもしれんな。案内してくれるか。
亭主 へえ。

廃寺。

僧と若侍の声が聞こえてくる。

僧 見てのとおり粗末な寺。私一人で小僧もおらん始末。
若侍 そうか。すまんな妙な事尋ねて。
僧 いやいや、お気になさらず。せつかくですから今茶でも。
若侍 茶は結構。それよりも
僧 それよりも？
若侍 一局どうか。好き者と聞いたが。
亭主 すいません。
僧 茶よりそちらでしたか。それは結構結構。
若侍 で、いくらだい。
僧 いくら？
若侍 とぼけなさんな。賭けだよ、賭け。
僧 賭けですか。
若侍 やってんだろ。
僧 まあ、時々は。
若侍 いくらだい。
僧 だいたいこれぐらいで。「指を一本たてる」
若侍 一朱かい。
亭主 一朱でもいいことはいいんですが、その一つ上は
亭主 一分！
若侍 大きく出たね。
亭主 およしになった方がいいんじゃないやありませんか。一分と言えばうちの十日分の泊まり賃だ。
僧 よしますか。
若侍 いや、やるよ。坊主に挑まれて引くわけにはいかないね。

僧 これはなかなか豪気なお侍さんだ。
亭主 いいんですか。

僧 こちらの方がいいっておっしゃってるんだ。水を差すな。
亭主 わたしやあんたに言ってるんですよ。

僧 よいよい。勝てばよいだけのこと。
若侍 こいつは怖い。

僧 こんなさびれた寺だ。めったに來ない鴨を逃す手はない。
若侍 鴨ときたか。

僧 気に障りましたか。
亭主 気をつけてくださいお侍さん。これが坊主の手ですから。

僧 これ、いらぬことを言うな。
亭主 わざと無礼を申して頭に血をのぼらせようってね。

若侍 なるほどそういうわけか。
僧 拙僧は口が悪いだけのこと。

若侍 では早速はじめようか。あやうくその手に乗るところだった。

二人は駒を並べる。

僧 はじめの前につつお願いが。

若侍 お願いとな。
僧 腰のものをお預かりいたしたい。

若侍 侍に刀をよこせとな。こいつはいったい何の決まりだい。
僧 決まりというほどのことでもないがね、お侍さんつてのは頭に血がのぼると時に

若侍 恐ろしいことをいたしますから。
僧 何が言いたい。

僧 小さい銭の時なら気前よく払えるものも、額が大きくなればなかなかさうもいかない。腰のものに手をかけて勝負を反古にするような輩が時におりますので。

若侍 おい、口が過ぎるぞ。
亭主 お侍さん、気をお鎮めなさって。

僧 見たところ、そなたも血の気が多そうだ。

若侍、怒りによって鞘を握る手に力がこもる。しかし意を決して刀を亭主に差し出す。

亭主 え。

若侍 預かっておれ。始める前から難癖つけられてはたまらない。

亭主　いいんですか。
若侍　勝負が終わるまで返すな。これでよいか。
僧　結構結構。でははじめますか。

暗くなる。将棋を指す音。

亭主　およしになったほうがいいんじゃないやありませんか。
若侍　何番やったかね。
亭主　もう続けて四番お負けになっておいでです。
若侍　四番か。という和一両。
亭主　へえ。一両というとうちなら四十日泊られます。
若侍　四十日かね。
亭主　こちらでおよしになったほうが。
若侍　と、亭主も言うておるが。

明かりがつく。

僧　うー。
若侍　あんた口ほどにもないね。
僧　まだまだ。
若侍　えー、なんだっけ。「朱でもいいことはいいんですが、その一つ上は」
亭主　わたしはよせと言ったんですがね。
若侍　「こんなさびれた寺だ。めったにこない鴨を逃す手はない」
亭主　鴨にされてるよ。
若侍　「お侍さんつてのは頭に血がのぼると時に恐ろしいことをいたしますから。」
亭主　なんて台詞をはけるあんたが怖いよ、その腕で。
僧　うるさい！黙っておれ！
若侍　お、血がのぼってきたね。
僧　ものは相談だが。
若侍　銭はまけないよ。
僧　そうではない。
若侍　額を下げるか。
僧　その逆よ。上げぬか。
亭主　はじまったよ、悪い癖だ。
若侍　正気かい。
僧　正気も正気。四番負けて一両とられた。このまま一局一分だと取り戻すのに四番

亭主 かかるのはまどろっこしい。一局二両でどうだ。
一両！

若侍 こいつはおもしろくなってきたね。乗った。
亭主 こいつは大変だ。

僧 くくくく。(笑う)

若侍 おいおいおい、なんだよ急に笑い出して。本当におかしくなちまったか。

僧 ああ、おかしくってしかたがない。

若侍 わらうところなんかありやしないだろ。

僧 おぬしの愚かさよ。

若侍 何？

僧 ここまでわしが何も考えずに負けておったとでも思ったか。一番二両。策にはま

りましたな。

若侍 てめえまさかわざと．．．。

僧 打てばわかる。くくくく．．．。

不気味に笑う僧。鐘の音。暗くなる。将棋を打つ音。

亭主 およしになったほうがいいんじゃないやありませんか。

若侍 何番やったかね。

亭主 四番。

若侍 という四両。

亭主 へえ。四両といううちなら百六十日。

若侍 お前のところなら半年近く泊まれたってわけか。

亭主 ここらでおよしになったほうが。

若侍 と、亭主も言うておるが。

明かりがつく。

僧 うー。

亭主 さっきのと合わせると五両になります。

僧 わかっておる！

亭主 わかっているのならここらで。

僧 うるさい！

若侍 まだやるかい。

亭主 これ以上やると本当の坊主になっちまうよ。

僧 がたがたぬかすと裏の墓場にうめて叩うぞ。

若侍 よしなよ、あんた坊主なんだから。

暗くなる。将棋を打つ音。

亭主 およしになったほうがいいんじゃないやありませんか。
若侍 何番やったかね。

亭主 さらに続けて四番お負けになっておいでです。
若侍 というと合わせて九両。

亭主 へえ。九両というとうちなら三百と六十日。
若侍 もう一年になるか。

亭主 へえ。一年ただ泊まり。
若侍 ……そのなんでも泊まり賃に換算するのやめねえか。
亭主 へえ。つい癖で。

若侍 なんだかありがたみも薄くならあ。
亭主 ここらでおよしになったほうが。
若侍 と、亭主も言うておるが。

明かりがつく。

僧 うー。

亭主 ここらが潮時じや、
僧 うー。

亭主 ね、九両ここに持つてきてしまいにしましうや。
僧 うー。まだまだ。

若侍 大丈夫かい、あんた払えんのかい。
僧 ちよっと失礼。

僧は、立ち上がり出ていく。

若侍 どこへ行くんだい。

僧 隣から持つて参る。
若侍 なんだい。隣にや千両箱でもあるのかい。

僧 千両箱より大事なご本像を。
若侍 いらないよ！
亭主 なんて坊主だ。

本当にいらないからな。変なもん持つてくるなよ。

僧は袋を持って帰ってくる。

若侍
なんだいそりゃ。
僧
これがうちのご本尊。
若侍
やけに小さい本尊だね。

僧は盤上の駒を払い落とし、持ってきた袋の中身をそこへ出す。それは将棋の駒。

若侍
おいおい、よしてくれよ。そんなものいらないよ。
僧
賭けるのではない。
若侍
どういうことで。
僧
駒を換えたい。
若侍
駒を換える？

僧は九両を放る。

僧
駒を換えて続きた。
亭主
なんのまじないだいそりゃ。丁半ばくちでいかさま疑ってサイコロ換えるって話は聞いたことあるが将棋の勝負で駒換えるなんて話は聞いたためしがない。
僧
だめかね。
若侍
いや、俺は別にかまわんよ。駒がかわったところで指す人間が変わるわけじゃないし。
僧
指す者は変わらんが人が変わるといふことはある。
若侍
どういふことだい。
僧
指せばわかる。

僧は駒を並べ始める。

僧
ものは相談だが。
若侍
今度はなんだい。盤を換えるかい。
僧
いや、賭け方を変える。
若侍
そいつは一体どういった具合に。
僧
いやな、わしはかれこれ九両をうまい具合にお前さんを持っていかれておる。人間き悪いね、あんたが勝手に負けただけじゃないか。
若侍
一両ずつ賭けても九番続けてわしが勝たねばならん。

若侍

じゃあ一番九両でいくかい。

僧

いや、それではわしが勝っても金がもとに戻るだけ。

若侍

まあそうなるね。

僧

そこでだ、王手することに二両ずつ積み上げてはいかがかな。

若侍

積み上げる。

僧

たとえばわしが王手をしたとする。その時二両をこの場へ置く。もしあんたが受けるなら二両だす。都合場に二両。一度の王手で勝負が決まることなどまずない。互いに五度ずつ王手をしたとすれば、

若侍

場に二十両。

僧

もちろんそこで終わるとも限らない。その後も一度の王手ごとに二両が詰みあがっていく算段。

若侍

勝てば総取り。

僧

負ければ坊主。

若侍

終わりは詰みか、

僧

積み上げるものがなくなるか。

若侍

・・・乗った。

若侍も駒を並べ始める。

亭主

ちよ、ちよっと待ってください。本当によろしいんですか。

若侍

どうした？

亭主

この勝負、ただ勝てばいいってわけじゃないんですぜ。

僧

お前が言わなくても気づいておるよ。

若侍

早々に片づけてしまえば銭は積み上がらない。かといってあんまり長引かせちまうと積み上げるもんがなくなっておしまい。ほどよい塩梅で詰ませねばならん。

亭主

その塩梅が難しいじゃありませんか。

若侍

それを読むのもまたこの勝負の妙味。

並べ終わったところで鐘が鳴る。

勝負が始まる。二人は無言で打つ。

僧

王手。一両。

若侍

初王手目の薬。その二両受けた。

二両が場におかれる。その後、王手のたびに二両ずつ置かれる。チャリンとお金
が積み上がるたびに緊張感が高まってくる。二十両積み上がったところで。

亭主 そろそろいいんじゃないですか。二十はいきましたよ。
若侍 わかっておる。・・・わかっておるが・・・
亭主 先ほどまでのように。

若侍 先ほどまでのようにいかぬのだ。
僧 駒が変わりましたからな。

若侍 駒だけじゃねえ。打ち筋が違う。
僧 角がいいでしょう。

若侍 ああ、角の動きがまるきり違う。
僧 つい先日手に入れた生きのいい駒で。

若侍 何言ってやがる。
僧 駒がね、ひとりで動いてくれるんです。

若侍 おかしなこと言ってやがらあ。駒がひとりで動くことなんかあるもんかい。
僧 ところがこの駒は動いてくれる。私だって感心してんですよ。へえ、そんな手があったんだなって。おっと王手かい。

僧はまた二両積み上げる。そこに若侍が二両重ねる。

僧 まだあったかい、積み上げるものが。

亭主 大丈夫かい、顔色が悪いよ。

若侍はだまって打つ。

僧 悪くもなるさ、そろそろ気づいておる頃あいだ。

若侍 ・・・。

僧 この将棋、私は詰ませる必要はないのだ。

若侍 ・・・。

僧 ただ積み上げさせれば。よいだけ。

若侍 ・・・。

僧 この男が積むものがなくなるまでね。王手。一両。

若侍はまた二両重ねる。息づまる金の重ね合いが続く。三十両ほど積み上がったところで。

僧 王手。

一両出す。若侍は動かない。

若侍

．．．。

僧

どうした。

若侍

．．．ない。．．．積むものが。

僧

なくなりましたか。

若侍

．．．。

僧

いくら重なっておるかな。

亭主

三十は。

僧

三十ですか。そのうち半分はわしが出した銭。あんたが出した十五のうち九両は

若侍

もともとわしの銭。とするとあんたの負けは六両。案外持っていなかつたな。

若侍

．．．。

僧は金を集める。

僧

惜しかったですな。六両が三十両に化けるところだった。この勝負、最後まで行けばあんたの勝ちだったかもしれんのかな。

僧は金を数える。

若侍

．．．待った。

僧

待ったは将棋のご法度。一度指した手はもとにはもどせぬ。

若侍

将棋の決まりは百も承知。待ってもらいたいのは手ではなく金。

僧

金を待てと。

若侍

その金は弟探すための大事な六両。今ここで失うわけにはいかんのだ。

僧

その大事な六両、あなたはお賭けになった。

若侍

．．．。

僧

弟探す大事な六両を。

若侍

待ってはもらえんか．．．。

僧

．．．ふふふ。

若侍

何がおかしい。

僧

わしも鬼でないでな。お前さんにそうまで言われれば考えなくてはならない。

若侍

そうか、待ってくれるか。

僧

しかしこれは将棋の勝負。待ったはご法度。待たずに前に進むならよい。

若侍

進もうにも賭ける物が。

僧

何も賭ける物が銭ばかりとは限らない。

若侍 銭でなくとも．．．。
僧 わしの欲しいものを積みさえすれば。
若侍 何が欲しい。
僧 お前さんの、命を。

間。

若侍 ．．．驚いた。坊主ってのは弔いが仕事かと思ってたんだが。
僧 弔いますよ。いただいた命を。
若侍 てめえがとった命をてめえで弔うか。いい仕事だな。
僧 お陰様で繁盛しております。
若侍 坊主丸儲けとはこのことだ。
僧 やりますか。
若侍 やらねえよ。命と金では間尺に合わねえ。
僧 間尺に合いませんか。
若侍 合わないね。
僧 ではどうでしょう．．．。私も命を賭けるといのは。命に命。良い釣り合いで。
若侍 あんたがほしがる俺の命とほしくもねえあんたの命。釣り合うものか。
僧 早合点なさるな、何も私の命を積もうってんじゃない。
若侍 じゃ誰の．．．。
また鐘がなる。

若侍 おい、誰が鐘ついてんだ．．．。
僧 ．．．。
若侍 小僧もいない粗末な寺って言ったなあんた。なのに．．．おい、あの鐘、誰がついてんだ。
僧 さあ、いかがしますかな。あんたの命とあんたの欲しがる命。この王手、受けるか否か！
若侍 答えろ！あの鐘は誰がついてんだ！おい、刀！

若侍は亭主に手を差し出す。しかし亭主は刀を渡さない。

若侍 おい！早くよこせ。
亭主 お返しできませぬ。
若侍 何を！？

亭主 お侍さんに言われましたもので。勝負が終わるまで返すなど。

亭主は大を僧に渡す。

僧 額が大きくなればなかなか。腰のものに手をかけて勝負を反古にするような輩が

時におりますので。そうそう、先日の男も。

若侍 お前たち……。

亭主はゆっくりと小を抜く。若侍は二人の刀の前に動けない。

亭主 逃げられないよ。両方からにらんでんだから。

暗闇がすべてを包む。了。